

平成 28 年 1 月 11 日

地元の魅力「石原の大神楽獅子舞(市指定・無形民俗文化財)」

昔は正月になると家々に獅子舞が回ってきて、家内安全など祈願してもらったことなどを思い出してみると、原市場地区には昔から伝承されている獅子舞がある。自治会連合会主催の敬老祝賀会のおめでたい宴席には、獅子舞「石倉獅子囃子保存会」、お囃子「中藤獅子連」のアトラクションでは参加されたお年寄りの皆さんはとても懐かしく楽しそうに観賞していました。

「昔を語る会」では産業、食生活などを話し合いましたが、文化・行事等で原市場の歴史を探索してみるには、現在も継承されている文化の一つ獅子舞にスポットあててみました、しかし獅子舞の知識もなく、取りあえず飯能市ホームページ文化財及び郷土史から内容を抜粋してみました。

飯能市ホームページ文化財資料より

正月第二日曜日(かつては 15 日)に行われる、一つの獅子頭を二人で操る「二人立ち」の大神楽系獅子舞で、獅子は一頭で行います。舞の前には「伊勢の御神楽」であることを示す口上を唱和します。

獅子舞は早朝から小名石倉・原市場地区の各戸を巡り、座敷で舞います。

舞は「ロッコウ」、「マイコメ」の 2 種類があり、篠笛・大胴太鼓・小太鼓・すり鉦の伴奏が伴います。「ロッコウ」は獅子頭を被ったマエ役が大幣を持って祓う動作をする舞で、「マイコメ」は獅子頭を手で操り、家中を祓って回り、家人の頭を噛む動作をして厄除けとします。その他、地区巡り出発前と最終地点で舞う「ネムリジン」という舞があります。また余興として、獅子頭を被って舞う「ハルサメ」と素踊り「カッポレ」があります。

各戸の他に地区内の寺社・堂祠でも獅子舞を行い、巡行の道すがら、他地区へ通じる道の地区境に幣を立て、祓いを行います。

“石原の村回り獅子 百二十年の伝承を守る” ふるさと漫録～奥武蔵原市場の今昔～

飯能地方で民俗芸能の一つ、獅子舞は山間地帯に多く伝承されている。

大抵の場合は神社境内で舞うという形態のものだが、その中で変わった獅子に原市場の「石原の回り獅子」がある。毎年、小正月の一月十五日に石倉と原市場の氏子各戸を回って、家内安全、無病息災祈願を舞うめずらしい芸能。

“二人立一頭獅子の伊勢派”

歴史は定かではないが、この地区には江戸末期から大神楽の芸が受け継がれていたらしい。以来、石倉・原市場両地区の若集たちによって百余年、この獅子舞は伝承されてきたようだが、いつのころか、青年団が組織されてからは、団支部の事業の一部と

なっていたと思われる。その青年団も戦後の一時期が過ぎて、この伝統芸能の継承も危惧されてきた昭和四十四年「石原獅子囃子保存会」が結成され、存続の灯は再び明々と輝きはじめた。”石原”とは、石倉と原市場の頭文字からそれぞれとった略で、この両地区は行政上の自治会こそは異なるが、ともに大字原市場で名栗川をはさんだ対岸同士だが、一体的な観念は協調性の強い地区でもあり、石・原となったようである。ただし、お囃子となると、この獅子舞とは全く別なもののように、それぞれの地区毎の鎮守の祭りに奏でられるものなのだが、それを演じるのが共に獅子舞と同じ人たちの集団であるために便宜上、獅子と囃子を一緒にした保存会となったようだ。

ここで、獅子舞とはどんなものなのか、由来をみると、「獅子頭をかぶって舞う神事的民俗芸能であり、日本人にとっては、獅子は空想上の威力ある聖獣であり、除魔招福の振興の対象だった。獅子舞には渡来派と固有派があると考えられ、渡来派を【二人立】、固有派と目されるものを【一人立】というようだ。二人立は大陸から伝来したと推定される。また、大神楽(代神楽)は、獅子神楽の一種で、獅子の霊力によって邪悪を祓い、火伏、息災延命を祈願する二人立ち(一頭に二人が入る)獅子舞。江戸太神楽には熱田派と伊勢派の二系統あって、江戸に出て寄席芸として定着した」

今回の文面は“ふるさと漫録 ～奥武蔵原市場の今昔～ 西村 一男氏著書
“石原の村回り獅子 百二十年の伝承を守る”から抽出させていただきました。

写真は敬老祝賀会での獅子舞アトラクション



以上